

## 行為の対象特定性の記述（ヒトを知る）

研究担当者：佐々木 正人（東京大学・大学院情報学環）

研究代表者：佐々木 正人（東京大学・大学院情報学環）[計画研究]

研究期間：平成14年度～平成17年度

### 研究成果概要

#### 行為の対象特定性の記述

##### 概要と結果：

行為とは環境の多様性や変化に柔軟に対応している動的システムである。行為を忠実に記述するためには行為が物とかかわる場面をなるべくそのまま扱う必要がある。本研究では頸髄損傷者が靴下を履く過程、高次脳機能障害者が卵を崩さずに割る過程をそれぞれ数ヶ月縦断的に観察し、物に関わる行為を記述する単位を検討した。

20歳代の頸髄損傷者が靴下を履く過程の分析では、身体運動を、1)地面に対する定位、2)手を足先に接近させる動き、3)靴下の操作(入り口を開くと足を押し入れる)に分けて記述することで、この行為の毎回の变化と持続を扱える可能性が示された(図1)。高次脳機能障害者が卵を割る過程の分析では、1)探索的な衝突と、2)割り込む衝突の2種の衝突の連鎖構造としてこの行為が記述できる可能性が示された(図2)。

行為は物と関わるたびにその姿を変える柔軟なシステムである。しかし毎回ものの意味を利用することに成功している。行為のこの性質を扱うためには身体の運動を、下位の数種の単位に分割して、それらの複合として行為を示すという方法がありうることを本研究は示唆した。ここでの発見は行為を内的なモデルとの関連や、外的な強化との関連で描いてきた従来の方法とは異なる。

特定性としての行為の記述によって認知研究はリアルに接近する一つの方法を得たといえる。

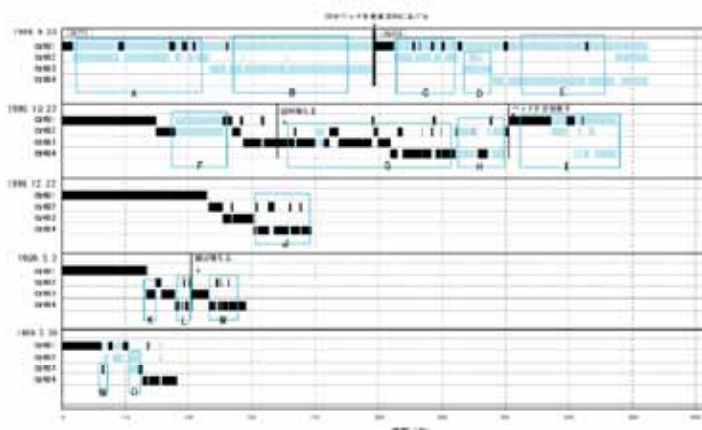


図1：靴下履きプロセスの発達

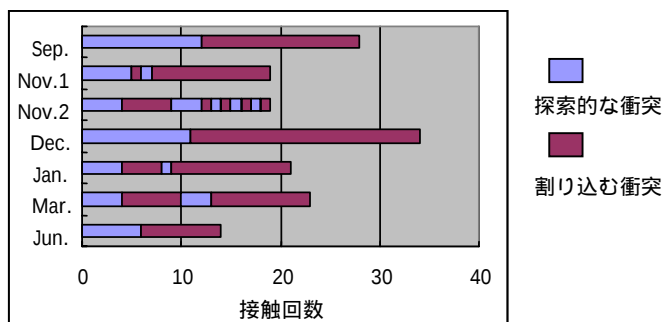


図2：高次脳機能障害者による卵を割る行為の推移  
(探索パターンにはボウルに接触することなく探索された場合を含む)

### 論文発表等

1. 佐々木正人: 物・環境を行為で記述する試み, 人工知能学会誌, 18(4), pp.399-407, 2003年.
2. 佐々木正人: ダーウィンの方法, 岩波書店, 2005年.